ジャンボタニシ駆除

化学農薬使わず

食害4分の1に

次作への耕起前が最適

静岡県

静岡県農林技術研究所は、高温の蒸気で雑草を防除する「蒸気除草機」を使い、水稲の苗を食害するスクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）を防除する体系を確立した。水稲を収穫した後の水田で使って貝を殺す技術。実証では次作の苗の食害を4分の1に抑えることができた。処理時間は10㌃当たり1時間ほどかかるため、被害の多い水田を優先して処理すると有効だ。駆除が難しいジャンボタニシで、新たな対策になると期待されている。

蒸気除草機から80度の熱

熱い蒸気でジャンボタニシを防除する蒸気除草機（静岡県農林技術研究所提供）

蒸気除草機は、高温の蒸気を地面に吹き付けながら田畑を走行する機械。同県浜松市の丸文製作所が製造・販売する。蒸気の温度は約80度に達する。高温で雑草や雑草の種子を枯らすもので、化学合成農薬を使わず、自然環境への負荷が小さい手法とされている。

同研究所は、この農機でジャンボタニシも防除できるとみて実証を重ね、防除体系を組み立てた。処理時期は、貝が地表にいる必要があるため、稲を収穫した後から耕起をする前までの期間が最適だ。土が乾燥していると、蒸気が浸透しやすいという。冬の間に貝を殺せれば、翌年の被害が減る。機械は、時速0・5㌔で走行すると効率が良い。これは、面積換算すると1時間当たり約10㌃になる。

掛川市の多発水田で行った試験では、対策なしの場合に移植苗の約80％が食害を受けたが、処理をした場合は約20％にとどめられた。食害される葉の枚数も減った。多発ではない水田でも、被害苗を減らすことができた。

ジャンボタニシは、駆除が難しく、産地では浅水管理や侵入防止などで被害を防いでいるのが現状だ。同研究所は「貝自体を殺す技術。処理に時間がかかるため、多発して困っている水田や、1枚の水田の中でもジャンボタニシの多い場所からやると効率が良い」と説明する。

福岡県

和牛肥育2カ月短縮

強化哺育、粗飼料を多給

福岡県農林業総合試験場は、高い肥育もと牛を生産でき、体重は約1㌔となり、9カ月短縮した。

なる経営で試し、同様の傾向を確認した。

この肥育牛を平均27・6カ月齢で出荷したところ、11頭の平均で枝肉重量497㌔だった。脂肪交雑（さし）の度合いを示すBMSナンバーが6・4、ロース芯面積が61平方㌢となり、約30カ月齢の通常出荷と遜色なかった。

試験場は「飼料代は通常と変わらないが、2カ月縮めた分、敷料などの費用が減る」（畜産部）と説明する。能力が高い子牛を生産するマニュアルや、その子牛を使った肥育技術などをまとめた冊子を近く作り、現場に普及する方針だ。

堆肥発酵熱 暖房に

農研機構 ふん尿利用研で事例

畜排せつ物を図るため、尿をエネ用する取例。

神奈川ターの高究員は、装置から活用に た。この ００００基 る。堆肥 ほど発酵 同センタ 水を温め トに使え た。マッ

産地化推進へ 初のセミナー

薬用機能性植物 推進機構が来月

大学や病院でつくる日本薬用機能性植物推進機構は12月15日、薬用作物や機能性野菜の産地化と利用について議論するセミナーを開く。福島県立医科大学は、地域で連携した薬用作物栽培と診療の事例を紹介する。薬用作物の産地化による、地方農業と医療の発展に向けて意見を交わす。

同機構は3月、千葉大学が代表機関となり、全国の大学や病院で設立の期待について話す。